

## 精神分析のはなし 第13話

JAM：セクシャリティーについて、フロイトはあることを発見し、重要だと考えました。それは、幼い子どもがセクシャリティーを持つこと、セクシャリティーとは複雑なものである、等々のことです。しかしながら、セクシャリティーにかんしてフロイトと精神分析が発見したものの中の射程すべてが理解されたわけではありません。

まず初めに、精神分析とは、「至るところセクシャリティー」ではありませんし、まったくそうではないのです。「至るところセクシャリティー」は、むしろ、神話のなかで表現される世界観、世界についての概念においてみられるものです。例えば東洋の智慧にみられます。そこでは、非常に明確に、はっきりと、男性原理と女性原理が存在しています。それらが宇宙全体のなかに現存し宇宙を組織していて、多様なしかたで混合し、陰と陽のあいだで作られうる最上の組み合わせをひとと探求するのです。

よろしい。私はちょっと急ぎ過ぎているとはわかっていますが、それが *pansexualisme* 汎セクシャリスム（汎性欲論）と呼ばれるものです。*pan* というギリシャ語は、すべて、を意味します。まさに精神分析は汎セクシャリスムではありません。なぜなら汎セクシャリスムにおいては、男性原理と女性原理が区別され対置されている、つまり補完的なものだからです。電磁気学において陽極とか陰極と言われるように、それはひとつの極です。

恋人たちが問題になるときは、まあこんな感じでしょうか。男と女のあいだにある愛は以下のようなものとされます。抵抗しがたい引きつける力が存在し、それが互いが互いがくっつくようとする、それはプラスとマイナスによって書かれうるひとつの定式によって物事の自然（本性）のなかに打ち立てられているとされます。ひとはこの定式に従っているのでしょうか。

より美しい考えもあります。古代ギリシャ神話のもので、それは補完性というこの夢想にひとつのか形を与えていました。プラトンによって発明された神話です。プラトンがアリストファネスの口で語らせているものです。人間はそれぞれひとつの最初の卵から出ていて、その最初の卵はその半身と溶けあい混じっている。そして誕生するとき、各自、その半身と分かれてしまった自身を見いだすことになり、その半身を探すべく世界にでることになるのだ、と。

ただし、アリストファネスの神話は、あなたはどこかで自身の補完物である半身をもつと言

っていますが、この補完物が必然的にあなたとは反対の性別をもつとは言っていません。

ですから対称的で対置される（男と女という）別々の性別の者たちがいて、その者たちからなる完璧な結婚という考えがありますが、それはすでにかなり複雑なものです。そして問題となっているのは、フロイトがセクシャリティについて発見したからですが—それはふたつの性の補完性のことです。生殖が問題となる場合は、おそらくこの補完性をひとは否定できないでしょう。それはよりどころになっていて、この話題についてかなりひとは苦心しています。とりわけ法、自然法をひとは作りました。そのやり方においてこそ、その目的=生殖、出産のためにこそ、人類は性的に他者の身体とかかわるべきである、としました。「自然法」というとき、法という語はたいへん曖昧です。それは、磁気を帯びた物体が必然的に従う、電磁気学の法、の意味の、法、ではありません。というのは、ひとの身体は補完の図式によるものとはまったくべつの仕方で、他者の身体とかかわることができるからです。

それは自然（本性）が意味するものの意味で、法です。自然が神の創造物であろうかぎりで、そうです。したがって、性的な自然法とは、こう言ってよければ、自然のひとつの意志あるいは願いの解釈でした。たとえば、自然において存在しているであろう神の欲望についての解釈であり、生物学的水準でのふたつの性の補完性を否定することは難しいということに、それは基づいています。

しっかりと認めなければならないのは、この解釈は以前そうであつただろうときほど確かなものではもうない、ということです。科学、生きている者の科学によって混乱させられて以降は、そうです。生殖は、もしこう言ってよければ、性的行為との関連でとても独立したものになったからです。その上、生殖において、ひと、男とか女ということがあまり問題ではなくなつたのです。それは精子と卵子の問題になりました。この次元で作用しているのは、まさにそれなのです。

ではフロイトはどうなのでしょうか？フロイトは、そうですね、すこし似たような発見をしました。フロイトは、人間の身体の中に、ひとつの実体が存在することを発見しました。括弧つき「ひとつの全体性」、「ひとつの存在」です—もし機能性というものが好まれるとするなら、それらは、変な、がつくでしょう。それ（ある実体）は女性の身体の中と同様に、男性の身体の中にも住まわっていて、種の再生産に役に立たなかつたし、他の身体との性的関係を確立するのにすら役に立たなかつたのです。その反対に、自身と身体の特殊な関係を確立するのに役立っていたのです。この身体と自身との関係は、少なくともラカン以降、享楽と呼ばれています。

もちろん、他者の身体を「享樂する」と呼ばれる、ある何かが存在します。しかし、この享樂の場はどのようなものなのでしょうか？どこにこの享樂は局在化されるのでしょうか？それは他者の身体のなかには局在化されません。こう言ってよければ、一者 (l'Un) の身体において、局在化されます。

それは大変唯物論的です。物事のこの見方に、私は賛成です。それは享樂の唯物論者で、享樂とは、こう言ってよければ、あなた自身の身体のひとつの状態です。ではその最終目的は何なのでしょうか？享樂は何の役に立つのでしょうか？

それについて知っているすべてのこと、それは享樂はそれ自体のために探されているということです。つまり、人間の身体の中では、自分自身を享樂しようと努める何ものかが存在していることを意味します。こう言ってよければ、自らを享樂しよう—再帰動詞 *se jouir* を用いることにしましょう、自分を～と思う *se penser* や、自分を移動させる *se déplacer* と同じように—自分を享樂しようと努める何ものかが、存在しているのです。

あなたは教皇ブノア 16 世になった司教が、最近相対主義の専制を喚起したことを覚えていますよね。そうです、そこで、精神分析の中では、少なくとも相対主義はありませんが、享樂はひとつの絶対性です。享樂は相対的ではありません。というのも享樂はそれ自体のため以外の何かのためには存在しないからです。それは最終目的として享樂自体を持っているからです。それは享樂のための、享樂の支配です。

それではいったい、享樂とはなんでしょうか？

ラカンは猫の例を出しました。喉をごろごろ言わせた猫は、体全体を震わせはじめます。フロイトは、享樂とは生理的欲求の満足ではなく、要求や欲望の満足でもないと、理解させました。生理的欲求や要求、欲望ではない行程、一時的衝動や運動とはべつのタイプのものを、ほとんど発明したのでした。当時まで決してその名を受け取ることのなかったある何かを、発明したのでした。

フロイトは、それを、欲動と呼びました。彼自身、欲動とはひとつの神話であるが、しかし享樂のパラドクスを考えるのに役に立つ神話である、と述べています。

そのパラドクスですが、それは、この欲動にはひとつの対象がなくてはならないということです。しかし肝心なのはそれではありません、何故なら対象とはべつの対象に置き換えられるものだからです。

大事なことは、対象の手段によって、何かが自らを享楽できるということです。私は例を挙げないといけないと思います。飢えの例をあげましょう。それは身体の、ひとつの状態です。食べ物、あなたに栄養を与える対象や実体への生理的欲求を警告するものが飢えである、と、認めましょう。

しかし欲動、フロイトが口唇欲動と呼んでいたものは、それとは別のものです。赤ん坊は乳房を欲し、ひとは赤ん坊におしゃぶりをあげます。それは良いことですし、そういうもので。しかしながらおしゃぶりはいかなる食べ物も与えず、つまりそれはまやかしです。それではおしゃぶりは、正確に言って何を満足させているのでしょうか？フロイトは、ある欲動を満たしていると想定しなければならないと言っていました。おしゃぶりは赤ん坊が自らを享楽するのを可能にしているのだ、と、言ったのです。口唇欲動についてフロイトが使っているイメージは、言う、ということで、それは口であり、口が自分（口）自体と接吻しているようなもの、です。そしてその対象は、重要ではありません。対象は、口が口自らと接吻をするための手段にすぎないのです。

つまり、享楽はべつの身体との関係を打ち立てるのではなく、あなた自身の身体に影響を与えるものです。それで欲動はあなたの身体のなかで自らを満足させることになるのです。精神分析の中で説明されているように、欲動はその場合、自体愛的なものです。ですからそこで、欲動の水準では、各自は各自自身のために存在しています。ひとは他者の代わりに死ぬことができますし、ひとは自己を犠牲にすることもできます。ひとは死ぬべき人の代わりになることができます。各自は自分の死や他者の死を前にしたら、たった一人です。

よろしいですか。たとえば、ひとは、各自、自分の享楽とともに、たった一人でいます。享楽の孤独が存在しています。それは理想や愛、利他主義によって覆われています。この享楽の孤独こそが、すべての覆いが取れたときに、分析の相談室で発見されるものなのです。

そのうえ、もし分析家がそこに存在しないとすれば、まずはこの過激な孤独が発見されたときにひとがあまり怖がらないためなのではないかと、自問することができます。それでは何

が発見されるのでしょうか？それはこういうことです。ひとは幻想、症状、欲望、思い出、誇大な考え、下らないものごとからなる監獄に閉じ込められたようなものなのだ、ということ。愛と憎しみ、退屈、快活、苦しみの監獄のなかに閉じ込められたようなもので、それらすべては、ただ享楽すること、自らを享楽するためにそうなっているのであり、自らを享樂するということは、実はただなのです。

それはお望みならひとつの真理であって、それは名前を持つてもいます。皮肉な真理という名です。そして分析家自身は、いかなる理想のメッセンジャーでもありません。実践においては愛や同情さえ感じることに警戒すべきで、分析家はこの皮肉な真理の水準に身を置くに違いありません。その真理は自らを享楽する絶対性に対応するものです。

しかしながら、ひとはこう言うでしょう。縛、カップル、社会が存在するではないか、と。そうです、まさにそれらすべては存在しています。そしてそれがどのようにこの享樂のことがらに導入されるのかを理解することは大変難しいのです。非常に急いで言うならば、それでもやはり、享樂は道具を必要としています。享樂は享樂する手段が必要です。たとえば口がおしゃぶりを必要とするように、です。

じつは真に補完的なものとは、そこに存在しています。それはこの対象のなかに存在するのです。おしゃぶりのように、この穴のあいた口のなかに、この栓のなかに、です。そういう理由で、ひとはまず精神分析のなかに、失われた対象という名のもとそれを発見したのでした。

アリストファネスにあるような、あなたの半身ではありません。しかしあなたが失ってしまったのであろう、あなたのうちでもっとも貴重なものとしての、この栓です。よろしい、そこから、個人は、享樂するものを提供する文明というものに、連結されます。実のところ、文明の動きに引きずられるもの、それはまた新しくなります。症状が新しく作られるのと同様です。